

[別紙 2]

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 木 下 弘 貴

本研究は複数医療機関受診者における重複投薬や薬剤の併用禁忌の発生の現状と医薬分業や薬剤費との関連について、1企業の健康保険組合のレセプトデータ1ヶ月分を解析し、以下の結果を得ている。

1. A社健康保険組合の2002年4月1日時点の組合員数36,438人中、2002年4月中に複数の医療機関より内服薬を含む処方を受けた人は1,311人であった。このうち処方期間内同効薬投薬（別々の医療機関から処方期間が1日以上重なって同効薬が投薬されたケース）を受けた人は159人であった。
2. 本研究のデータからは、複数医療機関から発行された処方せん間での薬剤の併用禁忌は1件もみられなかった。
3. 処方期間内同効薬投薬発生の要因に関する単変量解析の結果、複数医療機関から内服薬を含む処方を受けた人のうち、処方期間内同効薬投薬を受けた人の割合は、0歳代から50歳代まで連続的に小さくなる傾向がみられるが、60歳以上では、50歳代に比べて大きくなる傾向がみられた(マンテル検定: $p < 0.001$)。また、被保険者本人よりも家族の方が($p < 0.05$)、対象月の処方件数が多い方が(マンテル検定: $p < 0.001$)、処方期間内同効薬投薬が起こりやすくなっていた。すべての調剤を院外の薬局で受けた人の方が、処方期間内同効薬投薬を受けにくい傾向がみられた ($p < 0.1$)。
4. 処方期間内同効薬投薬の有無を従属変数、被保険者本人・家族の別、年齢カテゴリー(0-19歳、20-59歳、60歳以上)、医薬分業の状況、処方件数を独立変数としたロジスティック回帰分析を行った結果、年齢カテゴリーと処方件数のそれぞれについて、処方期間内同効薬投薬の有無と有意な関連がみられた。20-59歳の人と60歳以上の人は、0-19歳の人に比べて処方期間内同効薬投薬を受けにくくなっていた(20-59歳: $p < 0.05$ 、60歳以上: $p < 0.001$)。対象月の処方件数が多かった人の方が、処方期間内同効薬投薬を受けやすくなっていた ($p < 0.001$)。医薬分業の状況に関しては、すべて

の投薬を院外薬局で受けている人の方が、1件でも院内で投薬を受けている人に比べて、処方期間内同効薬投薬が起きにくい傾向がみられた ($p < 0.1$)。

5. 全年齢層と 0-19 歳、20-59 歳に関しては、同じ薬局で投薬を受けた場合の方が、違う薬局で投薬を受けた場合よりも、処方期間内同効薬投薬が起こりにくくなっていた ($p < 0.001$)。60 歳以上の層に関しては、有意な差はみられなかった。
6. 疾患の組み合わせに関しては、0-19 歳と 20-59 歳では、急性上気道感染症と急性上気道感染症、急性上気道感染症と急性気管支炎の組み合わせで、処方期間内同効薬投薬が最も多く発生していた。60 歳以上では、疾患の組み合わせの上位 2 つは、骨粗しょう症と骨粗しょう症、本態性高血圧症と本態性高血圧症であった。
7. 診療科の組み合わせに関しては、0-19 歳では、小児科と小児科、小児科と耳鼻咽喉科、小児科と内科の順で、20-59 歳では、内科と内科、内科と耳鼻咽喉科の順で、60 歳以上では、内科と内科、内科と整形外科、整形外科と整形外科の順で処方期間内同効薬投薬が多く発生していた。
8. 0-19 歳と 60 歳以上では、ほぼ同じ疾患で受診していた(重複受診)ケースが処方期間内同効薬投薬全体のそれぞれ 65.5%、64.1%あったが、20-59 歳ではこのようなケースは 52.9%であった。0-19 歳と 20-59 歳では、違う疾患に対して同効薬が処方、投薬されていたケースがそれぞれ 24.1%、19.6%あったが、60 歳以上では 1 件もなかった。
9. 薬効分類に関しては、0-19 歳では、アレルギー用薬、呼吸器官用薬、抗生物質製剤の順で、20-59 歳では、中枢神経系用薬、アレルギー用薬、抗生物質製剤の順で、60 歳以上では、ビタミン剤、消化器官用薬、循環器官用薬、中枢神経系用薬の順で処方期間内同効薬投薬が多かった。
10. 重複していた同効薬の薬価の高い方の薬剤費の合計は 155,271 円(複数医療機関から内服薬を含む処方を受けた人に対して投薬された薬剤費総額 12,144,510 円の 1.28%)で、薬価の低い方の薬剤費の合計は 85,438 円(同 0.70%)であった。

以上、本研究は、薬物治療の安全性および医療経済的観点の双方から重要な問題とされながら、これまで実証データに基づいた研究がほとんどなされてこなかった複数医療機関受診者における重複投薬や薬剤の併用禁忌の現状や医薬分業ならびに薬剤費との関連を明らかにした点で政策的にも大きな意義があり、学位の授与に値するものと考えられる。